

令和元年6月18日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03017

研究課題名(和文) 東大寺文書目録・点検記録・写本の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study on Todaiji Temple documents lists, check records, the manuscripts

研究代表者

森 哲也 (MORI, Tetsuya)

九州大学・人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：50315024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：平安～鎌倉期に作成された東大寺文書目録の基礎的研究を行い、記載された文書を具体的に比定し、考証過程を合わせた形でデータを一覧表化することで、当該期における東大寺印蔵からの文書出納の全体像把握と、その意義の解明が可能となった。また、点検記録・写本を集成して分析し、近世の史料探訪と写本の関係、写本の特徴とその流布状況について考察するとともに、新出史料を指摘し、国学者・好古家の知のネットワークについても解明を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東大寺文書目録の基礎的研究は、本課題とは別に行った文書出納日記の分析結果と合わせ、東大寺における文書出納のみならず、ひいては史料伝来の特質解明を行うための基礎データを提示するものである。点検記録・写本の集成と分析は、東大寺文書の現状成立過程を明確にするための手がかりになると同時に、国学者・好古家による知のネットワークの解明等、近世～近代史学史の進展に資するもので、新出史料の検出による学界への寄与も期待される。

研究成果の概要(英文)：In this study, I performed the basic study on Todaiji Temple documents lists made in the Heian - Kamakura period. By identifying of listed documents and making data tables with a historical investigation process, perspective grasp of the documents receipts and disbursements of Todaiji Temple in this time and elucidation of the significance were enabled. In addition, I collected check records, manuscripts and analyzed those. I considered historical materials investigation in early modern and the relations of the manuscripts, the characteristic of the manuscripts and the spread situation. Moreover, unknown historical materials were discovered newly, and intellectual network of the Japanese classical scholars were elucidated.

研究分野：日本史、史料学

キーワード：東大寺文書 東南院文書 東大寺 観世音寺 史料学 史料伝来論 史料探訪 好古家

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

日本古代～中世の歴史叙述にあたり、古文書が重要な史料の一群であることはいままでもない。それらは『大日本古文書』、『平安遺文』、『鎌倉遺文』等の史料集に活字化され（含、刊行中）、さまざまにその内容が活用されてきた。

しかし、たとえば六国史や律令格式が国家の立場で編纂され、古記録が基本的に記主の立場で書かれた点を想起するならば、それぞれから抽出できる歴史情報や、その意義付けに限界のあることも自明であろう。

したがって、古文書についても、個々の文書の内容を把握するだけでは不十分であり、現在に至るまでの文書群の形成、伝来の過程を踏まえておく必要があると考えられる。かつて網野善彦氏が、東寺の荘園研究、ひいては荘園史研究そのものの重大な弱点は、「寺院文書の伝来についての研究、史料学的な研究を怠ってきたところから生じたといっても過言ではない」（『網野善彦著作集第2巻 中世東寺と東寺領荘園』序章第2節、岩波書店、2007年、原著1978年）と指摘したように、文書群を総体として把握し、それがいかなる基準で形成・保管され現在まで伝来してきたかという、文書群としての生態を明らかにする必要がある。近年、主として史料学の立場から、そうした面の分析が進められているものの、文書群としての東大寺文書に関する通史的把握は、いまだ不十分と考えられる。

### 2. 研究の目的

上記のような研究状況を受け、歴史叙述の素材としての古文書は、個別の内容を活用する前提として、まず文書群としての通史的把握が踏まえらるべきであるとの立場から、日本における大文書群の1つ東大寺文書を対象に、史料学、史料伝来論の深化を図る一環として、以下の課題解明を目的としつつ研究を進める。

（1）平安～鎌倉期作成の文書目録その他（文書が引用、列挙された問注記等も含む）を対象として、記載文書の対照・比定を行い、別に行った文書出納日記の検討結果と合わせ、12～14世紀にわたる東大寺印蔵保管文書（以下、印蔵保管文書）の出納の全体像を提示し、史料学、史料伝来論の立場から文書出納、伝来の特質を解明する。

（2）近世～近代に作成された点検記録は、東大寺文書の現状成立過程を示すものでありながら、従来の研究では看過されてきたといつてよい。写本に関しても、一部、正倉院文書研究に付随して皆川完一氏「正倉院文書の整理とその写本-穂井田忠友と正集-」（『正倉院文書と古代中世史料の研究』吉川弘文館、2012年、初出1972年）による言及がなされているものの、その体系的把握は行われていない。しかし、一部、確認しえた限りでも、各点検記録や写本に示された東大寺文書の状況が、現状と異なる点が見出され、あるいは現在では所在不明となっている文書、学界未知の文書も見出されるなど、研究対象たる価値を十分に有していると考えられるので、東大寺文書の点検記録・写本に関して、体系的・網羅的な情報の集成と分析を行う。

### 3. 研究の方法

#### （1）平安～鎌倉期に作成された文書目録の基礎的研究

把握可能な約80点の文書目録等に記載された文書名について、原本、影写本、写真版、レクチグラフ、活字史料集、『岐阜県史』『兵庫県史』『三重県史』等の自治体史、日本古文書ユニオンカタログ（東京大学史料編纂所）等の各種データベースを活用しつつ、積文を確定した上で、記載された文書の比定作業を行い、具体的な根拠（文書名、年紀、紙数、内容等）を明示する形で一覧表化する。各文書目録等の作成の動機・背景も考慮に入れつつ、その成果に基づき、印蔵保管文書の全体像を抽出し、別に行った出納日記の考察結果と合わせ、12～14世紀にわたる印蔵保管文書の出納の全容を提示する。

#### （2）近世～近代における点検記録・写本の体系的・網羅的集成と分析。

東大寺文書の通史的把握の一環として、従来見過ごされがちであった、近世～近代に作成された東大寺文書の点検記録・写本の基礎的かつ網羅的集成と分析を行う。

具体的には、各種の論著、史料所蔵機関の目録（Web上による公開・刊本）、データベース等に基づく所在確認、史料調査を踏まえた上で、それぞれに記載された文書の比定を行って一覧表化する。その成果に基づき、各点検記録・写本から判明する当時の東大寺文書の状況、学界未紹介文書について考察を加える。合わせて、各点検記録・写本に関わる陳述史料の調査・分析にも努め、作成の背景、史料探訪事業との関係、写本の流布状況を明らかにするとともに、それに基づく国学者・好古家の知のネットワークの検出も行う。

### 4. 研究成果

#### （1）文書目録の基礎的研究

平安～鎌倉期に作成された文書目録等を対象として、東京大学史料編纂所、宮内庁書陵部、国立国会図書館、国立公文書館（内閣文庫）等において、関係史料、写真帳その他の調査を実施し、東大寺図書館等から購入した写真版による確認等と合わせて本文を確定した上で、記載文書の具体的な比定、考証過程を合わせた形でのデータの一覧表化を行うなど、基礎的研究を

進めた。

これにより、すでに成果として手元にある、出納日記の分析結果と合わせ、当該期における東大寺印蔵からの文書出納の全体像把握が可能になったと評価できる。これは、史料学・史料伝来論・東大寺史研究の基礎データとしての価値を有するが、具体的分析の過程で、公験としての東大寺文書の中核たる東南院文書の現状成立過程を考慮する必要性が痛感された。そのため、全体像の提示と、東大寺における文書保管・出納の特質解明に関しては、その分析結果を踏まえた上で、学界の共有財産化を図れるよう目指している。

## (2) 点検記録・写本の集成と分析

### ① 史料採訪事業と点検記録・写本

水戸徳川家、加賀前田家による史料採訪事業と、それに伴う点検記録に関して、金沢市立玉川図書館近世史料館、東洋文庫、東京大学史料編纂所等において、関係史料の撮影・調査、関係論著の確認を実施し、記載された文書・典籍の具体的比定と分析を行った。水戸家側の『大日本史編纂記録』『両京日記』、前田家側の『南都有之書物之覚』『松雲公採集遺編類纂』と、東大寺側の『東大寺年中行事記録』『東大寺執行所日記』等を比較対照することにより、採訪事業の過程に関する従来の見解の問題点を指摘するなど、基礎的な事実確認の部分から検討を加え、水戸彰考館に所蔵されていた写本（太平洋戦争末期に空襲による焼失分も含む）とその流布、現存写本との関係等について考察を進めた。これらは、近世史学史の一端に光をあてるものでもあり、他の写本の伝播に関する分析とともに、国学者・好古家による知のネットワーク解明の手がかりとなる。その一部は、学会発表「東大寺文書と史料採訪」として公表し、雑誌論文を作成中である。

その他、奈良県立図書情報館、国立公文書館（内閣文庫）等の他、Web上で公開されている分も合わせ、近世～近代作成の点検記録について、記載文書の比定・考証を行ったが、その結果に関しては、下記③に述べるように、未調査の写本群の分析と合わせた公表を目指している。

### ② 学界未紹介史料を含む写本の調査・分析

国立公文書館（内閣文庫）所蔵の坊城俊親『東大寺古文書』は、宮内庁書陵部所蔵の柳原紀光『諸文書部類』の情報源の1つで、未紹介の東大寺文書を含み、東南院文書第1櫃第8巻、第9巻の現状成立過程の解明に手がかりとなるものである。『諸文書部類』は、柳原紀光の『続史愚抄』編纂に際し、典拠として活用された写本であることを確認し、小杉樞郎『徴古雑抄 大和2』（国文学研究資料館所蔵）に筆録された東大寺文書も『諸文書部類』に依拠したと考えられる。これらの概要は、学会発表『諸文書部類』に見える東大寺文書』において示し、学術雑誌に投稿中である。

その他、国立国会図書館所蔵の『集古文書』は、松平定信により編まれた文書集を書写したものとされる（原本は焼失したと伝えられる）。その中に26点の東大寺文書が筆録されており、現在では所在未詳の文書も見出すことができる。『集古文書』の部分的写本として、『古文書模写』（彰考館文庫原蔵）、『古文書』（東京大学附属図書館南葵文庫所蔵）が伝わっており、写本の流布状況を窺うことができる。

### ③ 写本の特徴とその流布

写本の検討では、②で採り上げた『東大寺古文書』のように、筆録文書が独自である事例と、古代天皇の勅書、鎌倉將軍、室町將軍等に関わる文書を写した『東大寺宝蔵勅書并將軍家諸文章写』（早稲田大学図書館所蔵、他）のように、特定の文書が書写される事例の、おおむね2つの傾向を看取することができた。東大寺の近世史料によれば、江戸期、新任の奈良奉行が東大寺を視察する際、点検する文書がほぼ定まっていたことを参考にすると、後者に関しては、公開する東大寺側の意図が影響していると判断される。いずれの場合も、その転写本や、含まれる個別同一文書の写しが存在しており、史料採訪により作成された写本の転写、再転写が繰り返されたと考えられる。

ただ、書名・史料名に「東大寺」を冠さない写本に関しても、個別文書の写しが含まれる事例の存在を確認しており（たとえば、②の『集古文書』等はその1例である）、写本群の全容把握にまでは至っていない。すでに、調査・撮影・考証を行った『大橋長憲草稿』（宮内庁書陵部所蔵）、上記以外の『徴古雑抄』（国文学研究資料館所蔵）等も含め、今後、流布・転写に関わった国学者・好古家による知のネットワークの、さらなる考察を組み込んで全体像を提示する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2件）

- ① 森哲也、『入唐五家伝』の基礎的研究・補考、市史研究ふくおか、査読無、12、2017、93-97
- ② 森哲也、（書評と紹介）佐藤長門編『遣唐使と入唐僧の研究 附 校訂『入唐五家伝』、日本歴史、査読有、823、2016、95-97

〔学会発表〕（計 4件）

- ① 森哲也、観世音寺関係文書二題、平成30年度九州史学会大会、2018

- ②森哲也、観世音寺関係文書二題、第105回九州史学研究会古代史部会、2017
- ③森哲也、東大寺文書と史料探訪、2017年度九州史学研究会大会、2017
- ④森哲也、『諸文書部類』に見える東大寺文書、平成28年度九州史学会大会、2016

〔図書〕(計 件)

なし

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

なし

### (2) 研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。